

# 早稲田大学 商学部 日本史 講評

## 〔総合分析〕

出題形式	マーク・記述併用
試験時間	60分
特徴・その他	正誤問題の多さが特徴の本学部だが、正解を2つ選ばせる問題は、あるレベルを超えた受験生にとってはそれほど難しくはない。これに手こずるレベルでは合格は心もとないので、もっと細かいところまでつっこんだ学習をすべきである。

## 〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント	難易度
1	古代の仏教史	「適当なものがなければ6をマーク」とあるため消去法が使えないところがやっかいだが、問H以外は問題自体が難しくないので、楽に9割正解できるだろう。	やや易
2	中世の政治・外交	史料の一つは早稲田では何度も出されているものなので、安心して問題にあたれただろう。ところで、問F・Jの正解となる選択肢はどちらも教科書に記述されているが、それがわからなくても十分消去法で正解できる。こうした問題を過去問演習として解く際には、とにかく正解の選択肢に目をうばわれがちなので注意しよう。というのは、一般の入試の出題率から考えると、他の選択肢の正誤判別能力の方が重要だからである。とくに問Fの誤文を指摘できないのはまずい。	易
3	寛政の改革	問Iが難問。問B・C・D・Jが若干難しめだが、解答をある程度絞り込めるので、このうち2～3問くらいは正解できなければならない。学習の踏み込みが浅いとどれも正解できずに終わる。これから受験する人には自分の習得レベルをはかるモノサシととらえてもらいたい。	やや難
4	近代の政治・経済・外交	問D・G・Hがやや難しい。商学部定番の正解を2つ選ばせる問題だが、当然2つ正解して初めて得点となる。ときどき部分点を期待する人がいるが、商学部は全体で60点満点なので、この大問の配点は間違いなく10点である。第一、2つのうち片方だけが合っていた場合に1点与えられたところで意味はない。2つとも合っていた人は2点得点しているため、結局1点差であることには変わらないからだ。受験で甘えは何の役にも立たない。	標準

番号	出題内容	コメント	難易度
5	明治・大正時代の政府と政党	問Cがやや難しい。加波山事件の加波山は茨城県にあるのだが、狙われた三島通庸は栃木県令(福島県令と兼任)であった。ここにひっかかってしまった人がいるだろう。また、問Jは「四大政綱」を考えた人もいるだろうが、リード文と山川出版や三省堂の教科書を照らし合わせた結果、両教科書にある「積極政策」がふさわしいと判断した。	やや易
6	大正・昭和初期の経済と文化	問Aは問われ方に意表を突かれて解けなかった人も多いただろう。問Hの「卓袱台」は、清水書院の教科書に「ちゃぶ台」と書かれているので、漢字でなくても正解と主張したいところだが、正解の許容範囲を早稲田大学が発表することはないのでわからない。これが漢字でなければならないとすると、この大問の難易度は一段高くなる。	やや易